

# 小さな思いが集まれば

## 原発と世論

金曜デモの5年

「もう投票先は決められましたか」。新潟知事選挙が真つ最中の昨年十月、新潟市内の選挙事務所、磯貝潤子さん(四七)は名簿とにらめっこをしながら、電話をかけ続けていた。

うえーん。近くで誰かの赤ちゃんの泣き声。(頑張りなぐちゃ)。受話器を持つ手に力をこめた。

東京電力福島第一原発事故が起きたとき、磯貝さんは福島県郡山市で暮らしていた。新潟市へ自主避難したのはちょうど二年後の二〇一二年三月。仕事で引越せない夫とは別居せざるを得なかったが、長女(七)と次女(五)が外で遊んでいても気にならないし、風向

みや放射線量を気にせず、洗濯物を干せる。当たり前前暮らしが、うれしかった。その年の六月二十九日。東京・官邸前で金曜デモにすごい大勢の人が集まっていたらしい、というニュースは聞いていた。それに呼応して翌月から新潟市内でもデモが始まるという。

新潟県知事選で米山隆一氏が当選確実となり喜ぶ女性支持者ら。新潟市中央区で

### ③ ママさんの風



福島第一原発事故後の選挙 2012年12月、事故後初の大型国政選挙となる衆院選で、自民党が政権与党の民主党(現民進党)を破り、単独過半数を獲得した。世論調査では脱原発を求める人が多数を占めていたが、原発への態度をあいまいにして争点化を避けた自民党に対し「原発ゼロ」を公約する政党が乱立し、共倒れとなった。その後、13年、16年に参院選が、14年に衆院選があったが、いずれも経済政策などを訴えた与党が勝利。原発政策が主要争点となることはなかった。

さんは政治にも原発にもあまり関心がない、ごくふつふつの市民だったという。現状を当たり前のよう受け入れていたが、デモには「変えよう」とする人たちがいた。

確かに「変える」のは容易じゃない。デモを繰り返しても原発再稼働の大きな流れは強まっていく。焦りを感じることもあったという。

任期満了に伴う県知事選が近づいてきた昨年夏、原発再稼働に厳しい態度を示してきた現職知事が突然、不出馬を表明。再稼働に前のめりな自民などの推薦候補が「当確」とも目されたが、告示直前になって医師の米山隆一氏が立候補を決める。再稼働には慎重で、その是非を選挙で問いたいのだという。出遅れは否めないが、磯貝さんは「支えたい」と思った。

事務所に入り、選挙を手伝うようになったが、驚いたのは政治とは無縁の「ママさん」たちが大勢いたことだ。赤ちゃんを背負ったまま電話をかけたたり、小さいわが子をあやしめながら、チラシを折ったり。街頭でも不思議と子連れの女性が足を止めて聞き入ってくれた。

十月十六日の投票日。「原発フンイシュー(単一争点)」の選挙で、次点に六万票以上の差をつけ、米山知事が誕生する。「原発に高い関心があるのに(政治が)応えていないっていうフラストレーションが地下のマグマみたいになっていった。まず、お母さん方が『いいね』って言うてくれて周りの人へ関心が広がっていった。原発というのは、その時がくれば大いなる風なんです。米山知事は本紙にそう振り返る。「母親って家族のために値が張っても安全なお米や野菜を選ぶでしょ。同じように知事を選んだってことじゃないかな」。小さな思いが集まれば世の中だって変えられる。磯貝さんは今、そう確信している。